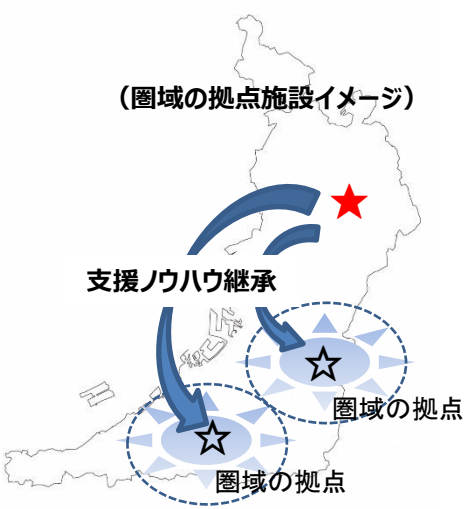
大阪府

令和６年度
重度知的障がい者地域生活支援体制整備事業
報告



大阪府福祉部障がい福祉室生活基盤推進課

重度知的障がい者地域生活支援体制整備事業

大阪府

現状・課題

１．重度知的障がいに対応可能なグループホーム（GH）に対するニーズ

○ 府内入所施設利用者の重度・高齢化が進み、今後さらに地域移行を進めるため、また、重度知的障がい者の「親なき後を見据えた」住まいの場の確保のためもにも、重度知的障がい者の支援ノウハウを持つGHが必要。

○ 地域生活支援拠点の役割の１つに「専門的人材の確保・養成」があるが、重度の知的障がい者の場合、支援方法が適切でないと自傷・他傷・破壊行為等の行動障がいを呈することがある。行動障がいに対応できる人材養成に関しては、これまでの国等の研究成果や少数のノウハウのある事業所の知見も必要とする。

２．府内の障がい者向けGHの状況

○ GHの事業所数・利用者数とも増加してきているが、非正規職員を多数雇用せざるを得ない状況で、GHごとに支援スキルは千差万別。重度障がい者を受入れている事業所も多くはない。

○ 重度知的障がい者の支援ノウハウを有する事業所は少なく、また、GHに対して助言等をする仕組みもないため、支援方法に行き詰った場合も、どう解決したらいいか苦慮する事業所が多い。

事業の概要

１．事業目的

重度知的障がい者に対応可能な支援スキルを持つ法人を増やし、重度知的障がい者の地域での生活を支える体制を整備する。

２．事業期間

Ｒ２年度～Ｒ６年度（Ｒ２年度はモデル実施）

※１法人３か年

令和４年度　１法人修了

令和５年度　１法人修了

令和６年度　４法人修了（予定）

３．事業内容

◆先駆的に取り組む法人に委託し、そのノウハウを活用して、重度知的障がい者に対応可能な６法人を養成する。参加法人は公募。

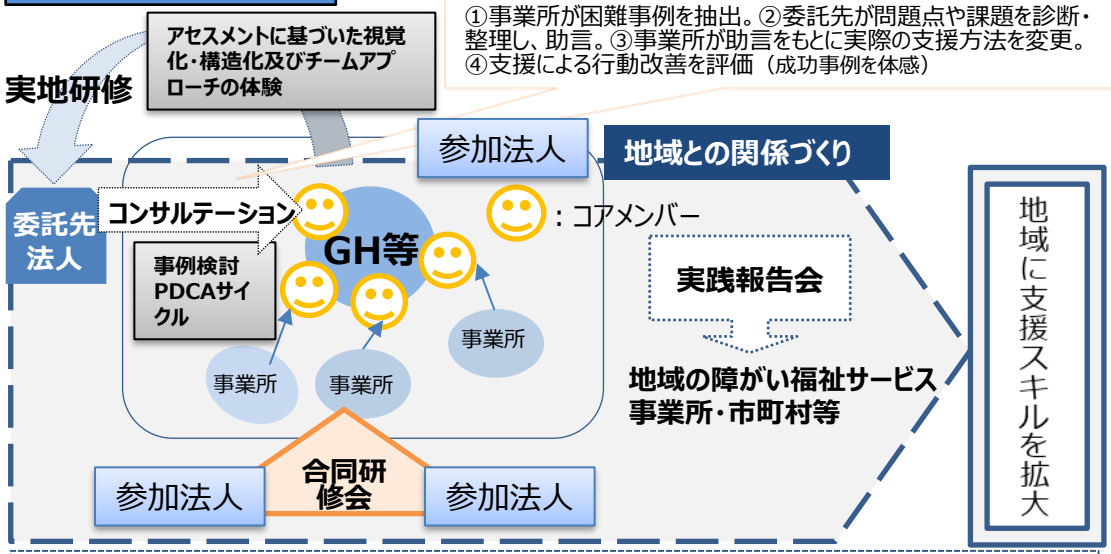
◆「コンサルテーション研修」「実地研修」等により、障がい特性に応じた専門的な支援方法や環境設定、組織マネジメントなど、法人全体で適切な支援を行う上で必要となる知識や技術を具体的かつ体系的に習得。

◆実践報告会の実施により地域に参加法人の取組み等を周知。

【事業のイメージ図】

【訪問ｺﾝｻﾙﾃｰｼｮﾝでは…】以下の手順を繰り返す。

①事業所が困難事例を抽出。②委託先が問題点や課題を診断・整理し、助言。③事業所が助言をもとに実際の支援方法を変更。④支援による行動改善を評価（成功事例を体感）



<1法人あたり３年間実施>

1年目：知識と技術の獲得と実践・・・法人内１事業所で実際に支援に困っている1～2事例をもとに、支援方法を学ぶ。

2年目：支援力の確立と定着・・・法人内複数事業所の数事例で実践を繰り返し、適切な支援を定着させ、GH等での支援ノウハウを獲得する。

3年目：教える力の獲得と実践・・・委託法人の訪問コンサルに同行し、他法人に対してコンサルテーションできるスキルを培う。

重度知的障がい者地域生活支援体制整備事業の具体的な取組みについて

法人	法人の特徴	コンサルテーションによる取組み等	地域における支援の展開
A	・高齢化・重度化に備え、グループホームの整備などに取り組んできた。 ・地域の施設ＣＳＷを担うなど、地域に根差した法人として取り組みを進めてきた。 ・就労継続B型でも重度障がい者を受入れるなど、法人として重度障がい者の支援に取り組んできた。	・入所施設からグループホームへの地域移行に向けた事例検討を通して、法人内の連携強化、人材育成を行う。情報収集とアセスメントの見直しがチームの共通認識となり、どんな支援が必要か会議でもアイデアを出し合えるようになる。 ・アセスメントから、課題となる行動(衣類へのこだわり、物投げ等)が利用者本人が困っているときに起こっていることがわかり、スケジュールや余暇支援の充実、職員の対応の統一などにより、落ち着いて過ごす時間が増え、課題となる行動もほぼなくなる。 ・部署間のコミュニケーションが増えて入所施設とグループホームの連携が深まり、2名のグループホームへの移行につながる。	・地域生活支援拠点等の専門的人材の養成、確保の取り組みとして、本事業を活用し「障がい特性の理解」の研修などを実施し、行政や地域の事業所とのつながりを深めている。 ・法人Dと合同で圏域において実践報告会を実施。
B	・入所施設で重度障がい者を受入れ支援に取り組んできた。 ・入所者の重度化・高齢化により、これまでの支援に行き詰まりを感じ、アセスメントに基づいた特性理解などの支援の必要性を感じ、法人として重度障がい者の地域移行、専門的な支援スキルの向上の必要性を認識してきた。	・アセスメントに基づき、対応を統一するための手順書等を作成し、統一した支援に向けて取り組んでいる。 ・障がい特性に応じた入所施設の大規模改修により、居室の個室化、生活エリアの構造化、バリアフリー化を行う。刺激を制御してわかりやすい生活空間にすることで利用者さんの安定につながる。また日中活動室を増設し、生活にメリハリをつけられるようになる。 ・職員間で動画による支援方法の共有や障がい特性の勉強会を実施する。また利用者に事業所内で役割のある作業を担ってもらうことで、職員の肯定的声かけも増え、利用者の落ち着いた生活につながる。	・入所施設併設の短期入所で緊急時の受入れを行ったあと、退所後に利用者の日中活動先の事業所と支援について協議を行う。 ・法人の所在する市において、実践報告会を実施。
C	・法人として、地域生活支援拠点等を担うなど、行政、地域の事業所と連携し、積極的に地域支援に取り組んできた。 ・地域の重度障がい者等を受入れ、支援していく中で強度行動障がいの状態を示す方や、愛着障がいを示す方の支援に難しさを感じ、職員間での情報共有を行いチーム支援を行うことの重要性を感じてきた。	・コンサルテーションの場に、法人内の各事業所から20名以上のスタッフが参加。全ての事業所から参加することで、法人全体で特性理解や強みを活かした視点やチームアプローチの重要性が認識できている。 ・モデルケースを中心に、物理的構造化、スケジュール、ワークシステムを活かした支援をされており、チーム全体の理解が進み、支援のアイデアが出てくることで、少しずつモデルケースが安定。結果が出ることで、さらに前向きに検討している。 ・スティック型のスケジュールや、色のマッチングを取り入れた作業場等、PDCAサイクルにより利用者本人にわかりやすい環境づくりを行うことで、穏やかに取り組めるようになる。	・市のグループホーム連絡会で事業所に対して研修を実施。 ・地域の事業所に対して個別に支援方法、記録の取り方や虐待防止等についての助言を行う。 ・法人が所在する市において実践報告会を実施。当事業を修了した法人にも呼びかけ、共同で実践報告を行う。
D	・外部講師を招聘し、障がい理解や構造化支援についての研修を行うなど人材育成に取り組んできた。 ・地域の重度障がい者等を受入れ支援に取り組む中で、強度行動障がいの状態を示す方や、愛着障がいを示す方の支援に難しさを感じてきた。	・日中活動場所を改修して個室ブースを創設。また個室やスヌーズレンルームを備えた別棟を創設し、環境音が減少し集中して自立課題に取り組める場所やゆったりと自由時間を過ごす空間を提供。 ・スケジュール、物理的構造化、ワークシステムを進めており、効果が出ている。 ・現場主導の発言が増え、自発的にPDCAサイクルを回しており、支援の質が向上している。 ・評価キットによりわかった利用者の強みを活かして自立課題を作成、また持ち運びができるスケジュールを作成することで、利用者本人が一人で過ごしやすい環境づくりを行う。日中活動場所でのシャワー浴支援を取り入れることで通所する楽しみを作り、課題となる行動（トイレでの水浴び等）がほぼなくなる。	・市の事業所連絡会の取組みの一環として、法人の事業所での体験実習や支援についての説明を行う。 ・法人Aと合同で圏域において実践報告会を実施。

実践を振り返って

事業に参加したコアメンバーや管理者の声（主なものや共通して言われていたことを抜粋）

・一人ひとりの特性（強みや苦手）を理解して支援することで利用者さんのしんどさが解消されることがわかった。
・個人の見識や経験の基づく持論をぶつけ合う話し合いから、法人全体で氷山モデルや構造化の支援や考え方を共有し、基礎ができてぶれない支援ができるようになった。
・コンサルテーションで毎回よいところを見つけて認めてもらえることで、こんなにモチベーションが上がるんだということを感じた。
・他法人の取組を知る機会がなく、これまで自分たちの支援を振り返ることをしていなかったことに気が付いた。
・他法人の成功事例を体験でき、取り組む意欲につながった。
・支援がうまく行っている法人では、非常勤さんからベテラン職員まで、立場や経験に関係なく、気づいたことなど活発な意見交換ができていた。
・実地研修先で、若手からベテランまでどの職員に支援に関する質問をしても、共通した回答が返ってきて、統一した支援が実施できていると感じた。
・他法人からうまくいった支援を共有してもらうことがあり、そのような横のつながりができて一緒に支援を考えられるようになった。
・他法人と相談し合えるつながりができたのは非常にありがたい。

参加者の声から推察されること

・事業参加前は、研修を受けて実践しようとしても周りの理解が得られず、実践が正しいかわからず、意欲をもって継続しにくい状況だったのではないか。
・これまで他法人と交流する機会が少なく、客観的に自分たちの支援を評価することがなく、経験や価値観によった支援になりがちだったのではないか。

事業を通して見えてきたこと

・「よい支援」を実践している外部の専門家から評価・助言を受けながら、客観的に支援の見直しができるため、自信や意欲を持ちながら、安心して支援に取り組むことができる。

・管理者や法人の代表が「よい」と思った取り組みは、個人のやる気だけに頼らず、日課の変更や生活の場の構造的な環境調整なども含めて、チームで取り組むことができ、法人内で押し進めやすい。

・訪問コンサルテーションと併せて実地研修を実施することで、「支援がうまく行く体験を経験できる」、「そこで暮らす利用者がいきいきと生活している姿に触れる」ことで、「よい支援」を体験し、自信をもって支援に取り組むことができる。

・同じ方向性をもった同士（法人）を増やすことで、直接的にも間接的にも、支援の実践やその普及にあたって法人同士のつながりが支えとなり、さらに「よい支援」が広がっていく。

今後に向けて

支援方法を習得した法人が地域に支援を展開していくための府のバックアップについて検討
・修了法人同士のつながり構築
・圏域別研修・事例検討の場づくり
・事業所間がつながり相談できる仕組みの構築　等

参考資料

施設評価の指標

	標準的な支援実施状況表			事業所名：			
	項目	1	2	3	4	5	6
①	アセスメント （障害特性シート）	活用していない	特定利用者の障害特性シートを使ってアセスメント	特定利用者に課題、場面を設定しての直接観察	特定利用者にフォーマルアセスメントの実施	複数の利用者にアセスメントが実施されている	フォーマル、インフォーマルアセスメントが事業所内で浸透し活用されている
②	アセスメント （氷山モデル）	活用していない	氷山モデルシートの考え方を知っている職員がいる	氷山モデルを記入したことがある	特定利用者に氷山モデルシートを使って支援の仮説が立てられている	複数の利用者に氷山モデルシートが活用されている	氷山モデルの考え方が事業所内で浸透し活用されている
③	支援手順書	活用していない	特定利用者に活用されている	複数のケースで活用されている	活用と改定が定期的に実施されている	複数の利用者に支援手順書が活用されている	支援手順書を活用し事業所内で統一した支援が実施できている
④	記録	活用していない	必要な記録のみ	スキャッタープロットが活用されている	目的に合わせた記録の活用	複数の記録が活用されている	事業所内で記録の活用、分析が浸透している
⑤	物理的構造化	活用していない	特定利用者に衝立など刺激の調整	活動エリアの設定や視覚的な指示などのアイディアが活用されている	必要に応じて再構造化が実施されている	複数の利用者に物理的構造化が活用されている	構造化のアイディアが事業所内で浸透し活用されている
⑥	視覚的スケジュール	活用していない	特定利用者に視覚的スケジュールが提示されている	特定の利用者に提示されたスケジュールが自立した活動につながっている	必要に応じて再構造化が実施されている	複数の利用者に視覚的なスケジュール活用されている	視覚的なスケジュールが事業所内で浸透し活用されている
⑦	ワークシステム	活用していない	特定利用者にワークシステムのアイディアが活用されている	特定利用者にワークシステムのアイディアが活用され自立的な活動につながっている	必要に応じて再構造化が実施されている	複数の利用者にワークシステムのアイディアが活用されている	ワークシステムのアイディアが事業所内で浸透し活用されている
⑧	チームアプローチ	理念・知識の共有 個別支援計画の推進 職員間のコミュニケーション（会議） 職員育成 上記項目で具体的な取り組みがない	理念・知識の共有 相談・連絡 職員間のコミュニケーション（会議） 職員育成 上記項目で1つ以上具体的な取り組みをしている	理念・知識の共有 相談・連絡 職員間のコミュニケーション（会議） 職員育成 上記項目で2つ以上具体的な取り組みをしている	理念・知識の共有 相談・連絡 職員間のコミュニケーション（会議） 職員育成 上記項目で3つ以上具体的な取り組みをしている	理念・知識の共有 相談・連絡 職員間のコミュニケーション（会議） 職員育成 上記項目すべてで具体的な取り組みをしている	利用者支援にチームで取り組むことができている
		具体的な取り組み	具体的な取り組み	具体的な取り組み	具体的な取り組み	具体的な取り組み	具体的な取り組み

アセスメント（障がい特性シート）
アセスメント（氷山モデル）
支援手順書
記録
物理的構造化
視覚的スケジュール
ワークシステム
チームアプローチ

1：実施されていない
2：特定のケースに活用
3：特定ケースについて活用の度合いが大きい
4：再構造化等のプロセスが実施されている
5：複数のケースに対して活用されている
6：事業所内で浸透している

その他の評価スケールについて

参考資料

・訪問コンサルテーションで検討した事例に対して実施。
・年2回（開始時と年度末）

[illegible]知的障がい者地域生活支援体制整備事業　対象利用者行動評価

法人名　（　　）　事業所名　（　　）　対象ご利用者名　（　　）

有無 あれば○	行動	頻度による評価			行動の程度などの特記事項（支援前の状況）	支援前評価点数	支援中間評価点数	支援後評価点数	支援前と支援後の差異（定量）支援後の特記事項（定性）
		0点	1点	2点					
	【表出コミュニケーション】本人独自の表現方法を用いた意思表示	独自の方法によらず意思表示できる	時々、独自の方法でないと意思表示できないことがある	常時独自の方法での意思表示 意思表示できない					
	【受容のコミュニケーション】言語以外のコミュニケーション手段を用いた説明の理解	日常生活において言葉以外の独自の方法（ジェスチャー、絵カード等）を用いなくても説明の理解ができる	時々、独自の方法でないと説明の理解ができないことがある	常に言葉以外の方法でないと説明理解ができない。 言葉以外の方法を用いても説明の理解ができない					
	【動き】多動または行動停止	まれにある。または、月に1回程度	1週間に1回程度	毎日（1日　　回）					
	【不安定な行動】パニックや不安定な行動	まれにある。または、月に1回程度	1週間に1回程度	毎日（1日　　回）					
	【自傷】自分の体を叩いたり傷つけたりすること	まれにある。または、月に1回程度	1週間に1回程度	毎日（1日　　回）					
	【他害・破壊】叩いたり蹴ったり、器物を壊したりなどの行為	まれにある。または、月に1回程度	1週間に1回程度	毎日（1日　　回）					
	【不適切な行為】他人に突然抱きついたり、断りもなく物を持ってくる行動	まれにある。または、月に1回程度	1週間に1回程度	毎日（1日　　回）					
	【大声・奇声】環境の変化により突発的に通常と違う声を出すこと	まれにある。または、月に1回程度	1週間に1回程度	毎日（1日　　回）					
	【突発的行動】突然走っていなくなるよいうな突発的な行動	まれにある。または、月に1回程度	1週間に1回程度	毎日（1日　　回）					
	【異食】食べれないものを食べること	まれにある。または、月に1回程度	1週間に1回程度	毎日（1日　　回）					
	【過食・多飲水・反すう】過食、多飲水、反すう等の食べること飲むことに関する行動	まれにある。または、月に1回程度	1週間に1回程度	毎日（1日　　回）					
	【確認行動】気になることなど、何度も同じ確認をする行動	まれにある。または、月に1回程度	1週間に1回程度	毎日（1日　　回）					
	【こだわり】物や人に対する固執、執着が激しい行動	まれにある。または、月に1回程度	1週間に1回程度	毎日（1日　　回）					
	【睡眠】睡眠がとれなくなったり、昼夜逆転などの睡眠に関すること	まれにある。または、月に1回程度	1週間に1回程度	毎日（1日の睡眠時間）					
	【排泄に関して】頻回にトイレに行くなど、排尿、排泄に関しての不適切な行動	まれにある。または、月に1回程度	1週間に1回程度	毎日（1日の睡眠時間）					
	その他、本人や周囲が困っている行動がある【行動のタイトル記入】	まれにある。または、月に1回程度	1週間に1回程度	毎日（1日の睡眠時間）					
			・支援前と支援後の総合的な変化 支援後「出来ることが増えた」「笑顔が増えた」など ・支援前、中間、支援後の合計点数			0	0	0	

第1回運営委員会で意見をいただきQOLの視点を盛り込む

その他の評価スケール

参考資料

・法人が運営する事業所の全職員に対して実施。
（可能な限りでご協力をお願いしております）
・年2回（開始時と年度末）
・コアメンバーから、コアメンバー以外にどの程度支援が広がっているか確認するために実施。
・今年度より、「支援を行う上での満足度」の項目を追加し、職員がいきいき働けているかどうかを確認。

内容	行動		※	程度
個別支援計画	今の状況に一番近いものを1～6より一つ選択して下さい。		1	個別支援計画を意識して支援したことがない。
			2	個別支援計画の達成を意識して、担当者が主に支援を行っている。
			3	個別支援計画の達成を担当者が意識して行っており、全職員（棟やユニットでも可）に周知している。
			4	個別支援計画の達成を担当者を含めた複数名が意識して実践している。
			5	個別支援計画の達成を全職員※（棟orユニットでも可）が意識して実践している。
			6	個別支援計画を全職員※（棟orユニットでも可）で検討・作成し、意識して実践している。
担当利用者の特性について ※特性＝得意なこと、好きなこと、苦手なこと、嫌いなこと等	今の状況に一番近いものを1～6より一つ選択して下さい。		1	必要性がない。
			2	理解したいが理解するのが難しい。
			3	なんとなく日々の行動から特性を理解しているが、適切に理解できているかどうかわからない。
			4	日々の行動のアセスメントやデータ等の根拠に基づき理解している。
			5	日々の行動のアセスメントやデータ等の根拠に基づき理解し、支援を組み立てている。
			6	日々の行動のアセスメントやデータ等の根拠に基づき理解し、支援を組み立てチームで共有している。
行動障がいや、自閉症の理解	今の状況に一番近いものを1～6より一つ選択して下さい。		1	必要性がない。
			2	理解したいが理解するのが難しい。
			3	研修等で学びなんとなく理解した。
			4	研修等で概ね理解している。実践にはもう少し時間がかかる。
			5	研修等で概ね理解し、利用者支援を実践している。
			6	研修等で概ね理解し、チーム全体で利用者支援を実践している。
特性に基づいた環境調整等	今の状況に一番近いものを1～6より一つ選択して下さい。		1	必要性がない。
			2	環境調整の方法を知らない。
			3	なんとなく理解し、実践している。
			4	本人の特性に基づき環境調整を行っている。
			5	本人の特性に基づき環境調整を行っており、必要に応じ見直し、改善している。
			6	本人の特性に基づき環境調整を行い、必要に応じ見直し改善を行い、マニュアル等を作成している。
自己学習	今の状況に一番近いものを1～6より一つ選択して下さい。		1	必要性がない。
			2	したいがする余裕や時間がない。
			3	職場から指名される研修に参加している。
			4	職場から指名される研修以外にも興味がある研修案内等があれば自ら希望し参加している。
			5	職場から指名される研修も含め、学んできた業務に必要な研修を他の職員に伝達している。
			6	研修（内部研修含む）で学んだことを、職場内などで講師となり研修を実施し伝達している。
職員間のコミュニケーション（相談等）	今の状況に一番近いものを1～6より一つ選択して下さい。		1	相談することがない。
			2	相談したいが、多忙等の理由で相談することが難しい。
			3	困ったことなどを仲の良い職員と相談し解決している。
			4	困ったことなどを、全職員※（棟、ユニット）で4週間に1回程度は会議等で相談できる環境がある。
			5	困ったことなどを、会議等で相談でき、さらにその都度チームに相談できる環境がある。
			6	困ったことなどを、会議等でその都度チームに相談できる環境があり、他事業所とも共有している。
法人の理念やビジョンについて	今の状況に一番近いものを1～6より一つ選択して下さい。		1	理念やビジョンがあるかどうかもしらない。
			2	理念やビジョンを教えてもらったが、覚えていない。
			3	理念やビジョンがあるということを知っているけど、知っている程度。
			4	理念やビジョンを職員会議等で定期的に確認し知っている。
			5	理念やビジョンに基づいて、支援を実践している。意識して実践している。
			6	理念やビジョンについて、意識して実践し、誰にでも説明できる。
支援を行う上での満足度	今の状況に一番近いものを1～6より一つ選択して下さい。		1	支援の負担感は大きく、かなり悩んで疲れている。
			2	支援の負担感は大きく、悩みも多いが、何とか頑張りたいと思っている。
			3	支援の負担感は軽減してきており、前向きになってきている。
			4	支援が楽しく感じられるようになってきている。
			5	支援が楽しく感じている。もっと様々なことを学びたい。
			6	支援が楽しい。現在のチームで様々なことを学び、周囲に伝えていきたい。

※全職員=宿直などの職員、休日職員等にも書面等でわかりやすく共有しているものも含む。

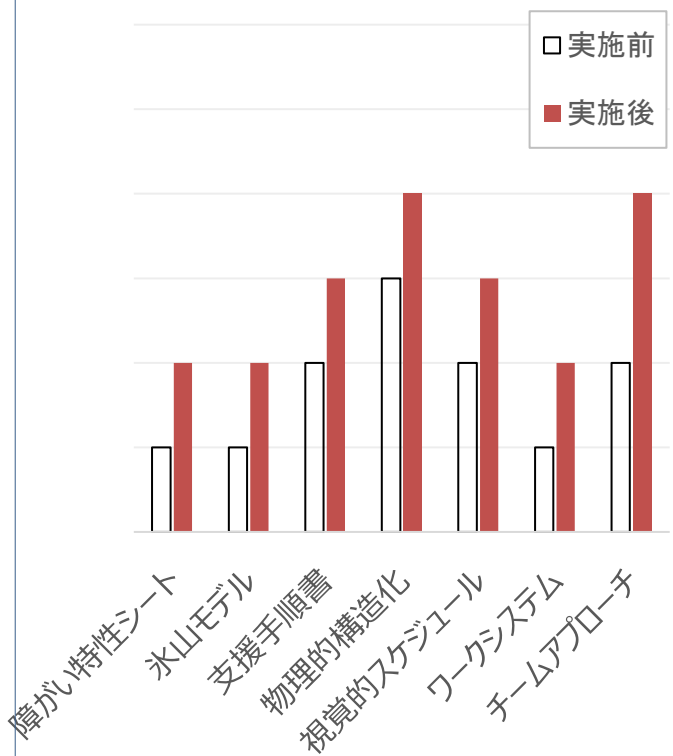
大阪府重度知的障がい者地域生活支援体制整備事業　事業効果

参考資料

取組みによる変化のイメージ（例）

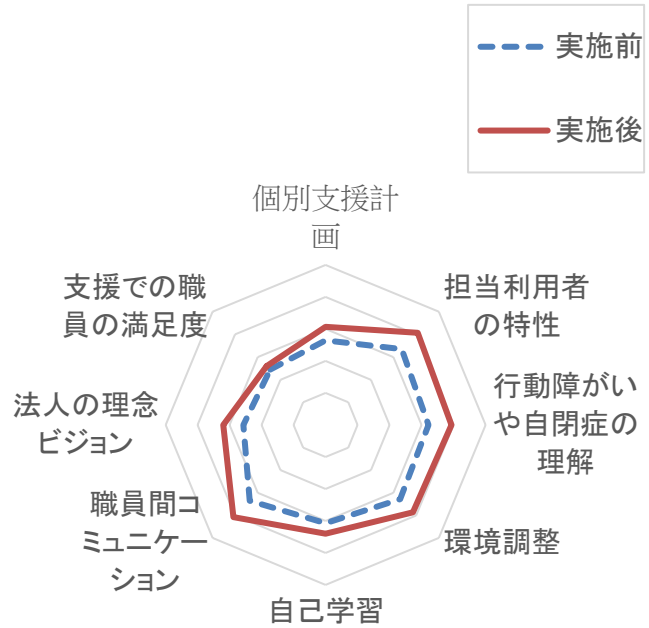
専門的支援の実施状況

※イメージ



法人内全職員向けアンケート

※イメージ



利用者行動指標（0～2点の頻度）

※イメージ

項目	実施前	実施後
表出コミュニケーション	2	2
受容コミュニケーション	2	1
多動・行動停止	2	1
自傷	2	1
他害・破壊	2	1
不適切な行為	2	1
大声・奇声	1	0
突発的行動	2	1
こだわり	2	2
睡眠	2	1
排泄関係	2	2
支援の拒否	2	1
合計（点）	23	14

※行動の頻度が多い程、点数が高い

- アセスメントに基づいた支援が浸透。
- 支援手順書や支援の根拠になる客観的な記録手法の活用。
- 視覚的スケジュール、ワークスケジュール等の具体的な支援の理解の浸透及び活用。
- 法人全体に「利用者の特性の理解」「行動障がいや自閉症の理解」といった障がい特性についての理解の浸透。
- 「職員間コミュニケーション」の広がり。